

山形県埋蔵文化財調査報告書第1-8集

大之越古墳

発掘調査報告書

1979

山形県教育委員会

だいのこし

大之越古墳

発掘調査報告書

昭和54年3月

序

今年度は、埼玉県行田市稻荷山古墳から出土した鉄劍から 115 の文字が発見されたことをはじめ、新しい考古学上の発見が相つぎ、日本の歴史学界のみならず、多くの国民の注目を集めました。それは本県内でも例外でなく、当大之越古墳をはじめとして多くの新しい知見がありました。

大之越古墳は、全く偶然に農道工事中に発見されたものであり、この地域には類例の少ないりっぱな内部構造と副葬品をもつ古墳で、年代的にも古く遡るものであります。惜しむらくは外表施設が不明で、内部も一部破壊にあって完全な状態ではありませんでした。

本報告書からもうかがわれるよう、古代における当地域のすぐれた文化水準と社会の進展を物語る資料として、各方面から報告書の発刊が期待されていましたので、年度内にとりまとめて、この度刊行の運びとなりました。

このたび、山形市において史跡に指定して復元保存をすることになりました。雪をいたぐ奥羽山系の連山を遠く望み、山形盆地の集落や水田を指呼のうちにおさめ、背後にピラミッド型の富神山をひるかえる現地大之越は、古代の王の奥津城としてまことにふさわしい場所であります。本報告書が古代において辺境と從来みなされていた出羽地域の古代文化解明の一助となれば幸いです。

大之越古墳の調査が行われたのは、年度末から年度頭初の忙がしい時期であり、工事を中途で延長されて協力を惜しまれなかった農林水産部耕地二課・山形平野土地改良事務所・山形西部土地改良区の担当の方々、地元門伝部落・山形市教育委員会に対して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和 54 年 3 月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

例　　言

- 1 本報告書は昭和 53 年 3 月 22 日に県道門伝・白鷹線新設工事とそれに取り付く農道拡幅工事の際、石棺及び環頭太刀・鉄劍・直刀・土器等その他の鉄製品が出土したとの通報を受け、山形県教育委員会が調査を実施した発掘調査報告書である。調査期間は昭和 53 年 4 月 10 日から 5 月 16 日までの延 26 日間である。
- 2 発掘調査は山形県教育委員会が主体となり、山形市教育委員会・山形県農林水産部耕地二課・山形西部土地改良区及び門伝部落会の協力を得て行なわれたものである。
- 3 挿図縮尺は遺構について 3 分の 1、出土遺物は 2 分の 1 を原則とし、それぞれにスケールを示した。また挿図と図版の遺物番号は同一である。
- 4 発掘調査は予備調査を川崎利夫・佐藤庄一・野尻 侃・佐藤正俊（県教育庁文化課）・横戸昭二（山形市教育委員会）が当たり、本調査を川崎・野尻・横戸が担当した。
- 5 本報告書作成にあたって分担執筆は以下の通りである。
執筆 I 章調査の経緯は川崎利夫・野尻 侃、II・III 章は野尻 侃、IV 章出土遺物の 1 号棺は川崎利夫、2 号棺は野尻 侃、IV 章総括は川崎利夫・野尻 侃・横戸昭二である。
編集 佐々木洋治・名和達朗・茨木光裕
- 6 本報告書の作成にあたって、次の方々により御協力や指導助言があった。銘記して謝意を表したい。
柏倉亮吉氏、坂本元治郎氏、長沢昌雄氏、斎藤勝氏、井上靖氏、加藤稔氏、
穴沢呼光氏、馬目順一氏、甘粕健氏、氏家和典氏、三宅敏之氏、亀井正道氏、
中里寿克氏、青木繁夫氏

目 次

I 調査の経緯	
調査に至る経過	1
調査の経過	3
II 古墳の位置と環境	
立地と環境	4
III 古墳の構造	
1 外部構造	6
2 内部構造	8
1号棺	10
2号棺	12
IV 出土遺物	
1号棺	16
環頭大刀	
鉄劍	
直刀	
鉄鎌・刀子・鉄斧・鉄鉗他	
小型丸底壇	
2号棺	20
馬具（杏葉・紋具・帶飾金具）	
〔付記〕	22
V 総括	
1 大之越古墳のまとめ	23
内部主体	
副葬品	
2 大之越古墳と周辺遺跡	28
3 本古墳の築造年代と被葬者について	31

挿図目次

第1図	大之越古墳位置図	2
第2図	地形図	5
第3図	調査全体図	7
第4図	工事用法面断面図	7
第5図	墓拡平面図	9
第6図	墓拡断面図	10
第7図	1号棺展開図	11
第8図	2号棺展開図	13
第9図	1号棺出土遺物 1環頭太刀 2鉄劍 3直刀	17
第10図	1・2号棺出土遺物 1~22・24・42、1号棺 40、2号棺	19
第11図	1・2号棺出土遺物 21・41、1号棺 23~32・36~39、2号棺	21
第12図	大之越古墳と周辺遺跡	29
付表1	周辺遺跡一覧表	30

図版目次

図版1	大之越古墳遠景（富神山を望む）	大之越古墳近景
図版2	墳丘基盤断面	発掘区全景
図版3	石棺埋設部掘方（右、1号棺 左、2号棺）	周溝（？）
図版4	1号棺全景	1号棺内部
図版5	1号棺東長側石断面	1号棺短側石（外面）
図版6	1号棺埋設部掘方断面	1・2号棺全景
図版7	2号棺蓋石上の自然縫	2号棺蓋石
図版8	2号棺蓋石南半部	2号棺蓋石北半部積状態
図版9	2号棺蓋石取り上げ後	1・2号棺清掃後
図版10	杏葉出土状況	絞具出土状況
図版11	遊環出土状況	帶飾金具出土状況
図版12	1号棺出土遺物（環頭太刀・鉄劍・直刀）	
図版13	1号棺出土遺物（環頭太刀・鉄劍・直刀柄頭部分・小型丸底壺）	2分の1
図版14	出土遺物 1~22 1号棺 23~40 2号棺	
図版15	環頭大刀把頭の透視写真	

I 調査の経緯

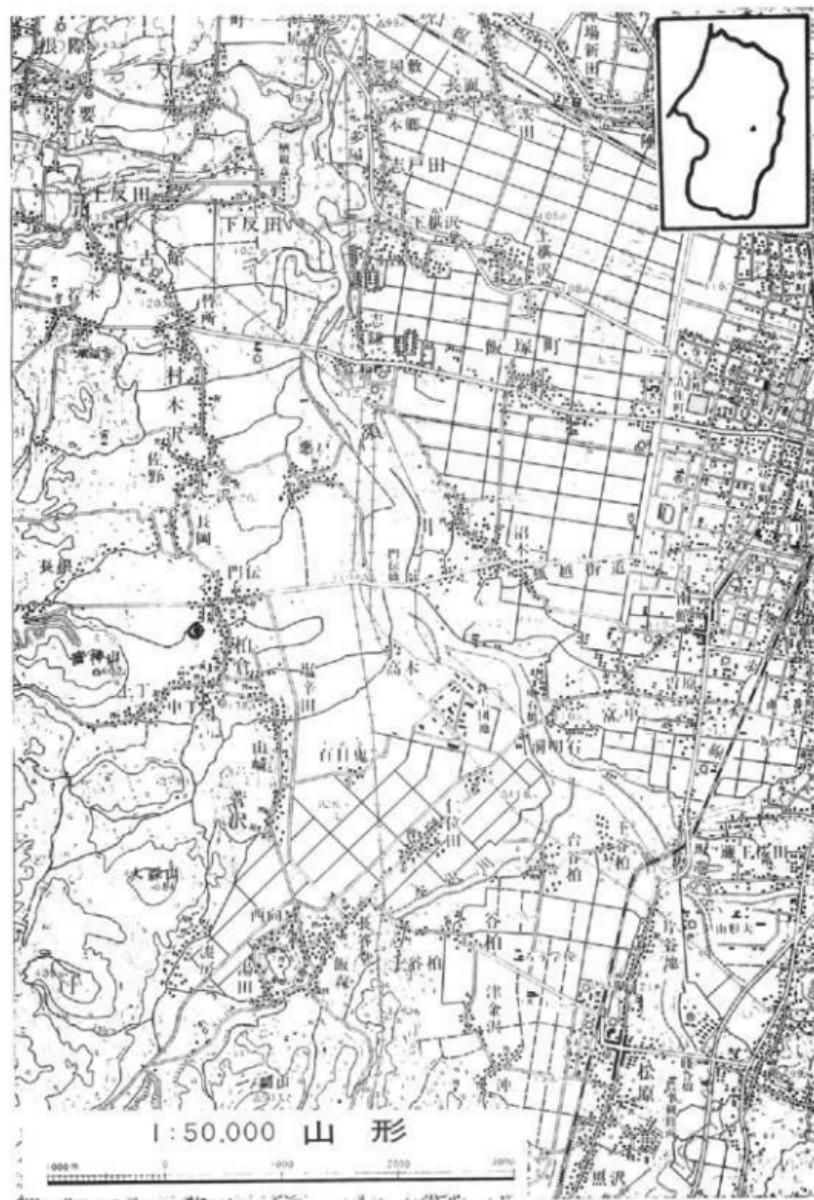
調査に至る経過 昭和 53 年 3 月 22 日、県道門伝・白鷹線の工事中に、山形市大字門伝字大の越地内において、県道に取り付く農道を拡幅掘さくの際刀剣が出土したとの通報を山形県土木部道路建設課よりえた山形県教育庁文化課では翌 23 日、職員の川崎が道路建設課と直接工事を所管する山形建設事務所の担当職員と共に現地に赴き、出土状況を調査した。現地では、道路の法面に半壊した箱式石棺が露出して、棺内より出土した環頭大刀・鉄劍・直刀・鉄斧・刀子、その他の鉄製品が棺上の平石の上に置かれていた。それらの遺物を直ちに収納して、遺跡の部分に工事がかかるないよう要請した。

本地域では稀にみる副葬品が豊富な、しかも年代的にも古い貴重な古墳であると思われる所以、文化課では所轄の農林水産部耕地二課・須川西部土地改良区・山形市教育委員会及び地元の部落会と折衝して調査についての諒解をえた。

そして一時工事を中断して、4 月 10 日より 14 日まで文化課職員による予備調査を実施し、当古墳を大之越古墳と命名した。その結果、墳丘は失われ、石棺埋没部分も道路によって切られ半壊の状態にあったが、周濠の存在や墳丘の痕跡・石棺の埋置状況なども把握しうる状態にあったので、あらためて 4 月 17 日より本調査を行った。

現地の調査には、主として文化課職員の川崎利夫・野尻 侃・山形市教育委員会より横戸昭二があたった。また柏倉亮吉山形大学名誉教授より現地での指導をいただいた。当初 4 月末日で調査完了の予定であったが、工事中に発見された石棺に隣接する下部よりもう 1 基の箱式石棺があらわれたので、再びにわたって調査期間を延長し、5 月 16 日に完了した。実調査日数は 26 日間であり、地元はじめ各方面の理解と協力がなかったら調査は不可能であったろう。

その後 5 月 28 日には、地元門伝部落会のよびかけで古墳の盛大な供養祭が行われ、また 6 月 3 日より 7 日まで山形県立博物館で「大之越古墳展」が開かれて、隣接県からも多数の参観者があった。そして地元の声を反映して、山形市教育委員会では 7 月に市史跡として指定することに決定し、保存をはかることになった。なお、出土した遺物のうち、鉄製品については、保存処理を行い、適切な保管をはかりたい所存である。



第1図 位置図

調査の経過

発掘調査は昭和52年4月10日から5月16日までの延26日間行なった。当初調査は古墳が破壊され、石棺が露出しているとの事から残存している石棺を計測し、未だ破壊がまぬがれた地域で古墳の外部施設の確認を行なう事を主目的とした。しかし、当石棺にややずれた地下部に新たな掘り込みが確認され、調査の継続を余儀なくされた。

調査の全般的な経過は以下の通りである。

4月10日～14日

石棺発見の通報を受けた文化課では職員の佐藤庄一・野尻侃・佐藤正俊および、山形市教育委員会社会教育課職員横戸昭二の4名で古墳の規模・石棺測図の調査を開始し、山形市名誉教授柏倉亮吉先生の指導を受けた。

調査は開口露出している石棺の主軸方向に合わせ、石棺の中心から南北40m、東西30mの範囲に2mを基準とするグリッドを配し、呼称はy軸(南北)6・7・8……15、x軸(東西)10・11・12……18とした。y軸から6～10グリッドと呼ぶ。

設定したグリッドの南北10列と東西11列を石棺埋設状況、周濠の確認を行い、周濠と考えられる落ち込みを10～8・9グリッドと、13～14～11グリッドで検出。周濠内の覆土を掘り下げる。一方では石棺を露出させた工事用法面を精査し、墳丘基礎基盤層の観察を行う。11～11グリッドにおいて石棺埋設の掘り方を確認。掘り方の全容を把握するため推定される周囲のグリッドを粗掘りする。測図作業は調査した南北10列と東西11列の断面図作成、石棺平面図測量、グリッド配図作成作業を行う。その結果、石棺埋設の掘り方、周濠や、墳丘の痕跡など調査の完了するまで期間の延長を決定。

4月17日～4月21日

法面の観察で、墳丘基盤が確認されたので、調査区を6～10～11～15グリッドに拡張し、基盤まで粗掘りを行なう。この期間は時折り降雨があり、作業を中断した。前週で確認された周濠のプランを追うが明瞭に検出されなかった。

4月24日～4月28日

10～10～11グリッドの面精査をすると、石棺の掘り方に対してやや直角に変化する別の掘り方を確認した。この掘り方は南部へ長方形に大きく広がり、内部には大きな自然礫が入り込んでいる。露出した石棺の掘り方が、この掘り方を切り込んでいるため、一時期古い掘り方で、別の石棺の可能性があり石棺測図と合わせ掘り方内の石を平面測図する。

5月1日～5月10日

石棺を清掃。土砂をフリイにかけ小鉄片を見い出す。一方掘り方内の石を取り上げながら測図作業を進めた。取りはずしていくと、板状の石が折り重って検出。予想通り新たな

石棺が発見された。このため調査の延期が問題となり、文化課・市教委・耕地二課・土地改良区・地元門伝部落の五者と協議し、一週間の延期となり続行する。

石棺が二基発見されたことにより、先に発見された石棺を1号棺、新たに発見された石棺を2号棺と呼称する。調査は2号棺掘り方に対して十字の区割りをかけ一区画ずつ掘り下げ、蓋石の間からは紋具が出土。5月10日には2号棺蓋石の南半部を取りのぞく作業のため、報道関係者が多数見学、その際蓋石上面から紋具・杏葉・帯飾具・金具（資金具か辻金具）等12片の遺物を検出。取り上げながら写真撮影・断面図測図作業・1号棺展開図測図を行う。

5月11日～5月16日

蓋石を全て取り上げ、内部の清掃を行い、写真撮影を行う。石棺復元のための石に番号を付け取り上げたため、石を順番にかたづける。清掃中に棺内より帯飾金具が出土。これは内部に納められたものではなく、蓋石の透き間から入り込んだものと考えられる。

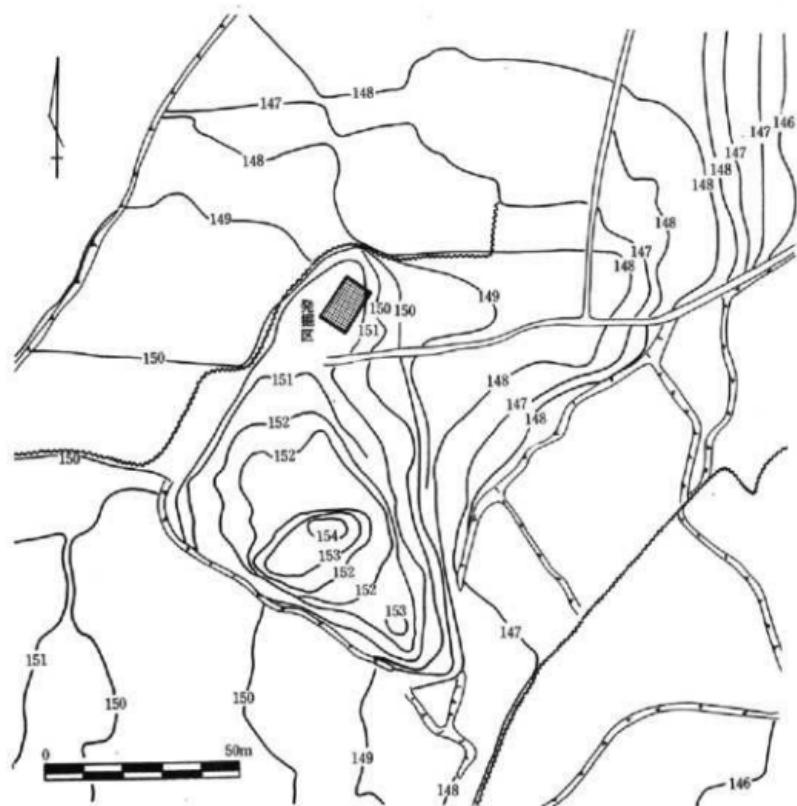
1・2号棺の展開図を測図しながら石を取り上げ、断面図・側面図を完了させる。石棺を取り上げたのち、掘り方内の清掃を行い、5月15日全調査を終了し、16日機材の撤収、関係諸機関へ調査終了を報告し、打ち上げ会を行なった。

II 位置と環境

立地と環境（第2図）

山形盆地西部出羽丘陵より流下する小河川は、奥羽山脈藏王山系より源を発する須川に合流する。小河川は須川に東流しながら扇状地を形成し、いくつかの低平な丘陵を残している。

本古墳は富神川が形成する扇状地の低丘陵上に立地する。付近には同様な残丘がいくつもあり、それらを囲むように水田が広がっている。地籍は山形市大字門伝字大之越1119番地、海拔150mを測る。東方には山形市街地をのぞみ、西方500mには裾を置いて急斜面でそそり立つ富神山がある。海拔222mの円錐形をした山で、まさにピラミッドのような感を受ける。この山が見える周囲には本古墳より東南東1200mに、径56m、東北最大の埴輪をもつ円墳菅沢2号古墳、また南東700mには中林古墳、北に1500mの位置で速見堂古墳群があり、この地を含む山形盆地南西部は県下有数の古墳密集地帯である。そして古式土師器を出土する集落跡も谷柏・柏倉坊屋敷・塩辛田遺跡などで発見され、塩辛田遺跡では方形の堅穴住居跡が検出されている。富神山は石が豊富で、板状に割れる石英粗面岩



第2図 地形図

を産出する。本古墳や菅沢古墳・谷柏古墳でもこの石が使用されている。

III 古墳の構造

1 外部構造（第3・4図）

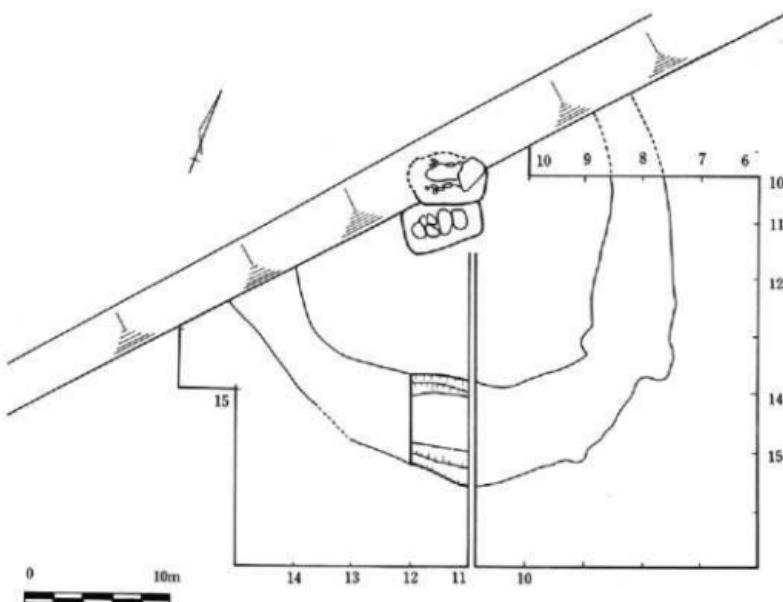
石棺を露出させた工事用法面の精査で墳丘基礎基盤層を観察し、断面図を作成した結果を記述する（第4図）。

墳丘上部は整地されており、平坦となっている。断面によれば、第I層黄褐色土ブロック層で堅くしまっている。第II層暗褐色土層で部分的に黄褐色ブロックを混在している。第III層黒色土層粘着性があり、赤色粒子を含む。第IV層が地山の黄褐色砂利層である。

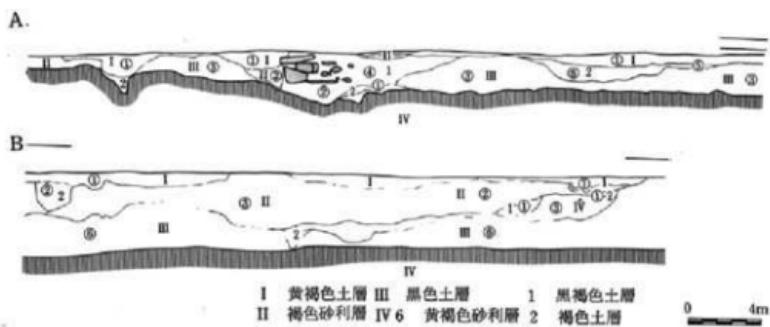
石棺が検出された地点から北へ5mの所と南に6mから始まる浅い落ち込みがある。平面からの精査で、周溝と考えられるが、北側の落ち込み部は後世の根切り溝により擾乱を受けている。I・II層は整地の土層と思われ、第III層が墳丘基盤層と考えられる。

11-11~15グリッドにサブレンチを入れ、III層の黒色土層を10cm程掘り下げる。11-13・14グリッド内に黄褐色土層が幅1.8mに検出され、法面に表わされた落ち込みとつながっている。またさらに黒色土層を地山面まで掘り下げる。2号棺墳丘の構築状態を示す、墳丘の立ち上がりだけが見いだされた。同様に5~9-10グリッドにもトレンチとして掘り下げる。7・8-10グリッド内に黄褐色土に拳大の自然石が混在して検出され、これも法面に表わされた落ち込みとつながっている。しかし上記したように後世の根切り溝と重複しているため明確な現われ方を示していない。幅も11-13・14グリッドで検出された2.3mのように広くではなく、幅1.8mの狭い溝である。しかしながらこの二カ所で検出された溝は10~15-7~15グリッドを面から精査するとやや円形につながっているが、8・9-13~15グリッド内で不明確な落ち込み状態を示し、推定ではあるが帆立貝式古墳のクビレ部ではとも考えたが、根切り溝との重複やこの部分が時間的制約で未掘となり不明である。ここでは径15~16m、幅1.8~2.3m、深さ35~55cmをもつ円墳の周溝と考える方が妥当である。この周溝は溝の覆土が地山の黄褐色土で、拳大の自然石がつめこまれていることや、石棺の墓壙の切り合い関係から2号棺のものと考えられる。1号棺の周溝は工事用法面での観察で明確なものが現われていないが、本古墳の存在している地形から考え合わせると、独立丘の一端を利用し、古墳の規模としたものであろう。法面における断面の観察で、石棺より北方18m、南方に20mの地点に溝跡と思われる第III層の落ち込み部が見られたが、面からの調査が出来なかった。断面だけから考えれば、径40m前後の墳丘をもつ古墳とも考えられ、その墳丘は長い時代の流れにより平坦になってしまったものであろう。

墳丘基盤層は第III層黒色土層と前述したが、このIII層は墳丘と推定される内側の黒色土



第3図 調査全体図



第4図 工事用法面断面図

層と、墳丘推定範囲外の黒色土層とは大きな違いがある。推定範囲外の黒色土層中には拳大の自然礫や小礫が混在しており、内側の黒色土層中はバサバサしたやや粘着性をもつ土層で、土師器の小破片や炭化物粒子を含んでおり、墳丘構築の際黒色土層を整地したものと考えられる。11-11~15 グリッドサブトレントの断面には墳丘構築状態を示す、墳丘の立ち上がりこの黒色土層にわずかに見い出された。

以上外部構造について述べたが、要約すれば、白鷹山系から源を発した小河川は本地域でいくつかの沖積低台地を形成し、本古墳はその中の一つの低台地を利用し、築造された古墳と考えられる。しかしながらこの低台地は長い年月の間に削平され、造営時の形は見ることが出来ず、かろうじて2号棺を有する墳丘だけが立ち上がりを示し、周溝の内径で15~16m の円墳と推定出来るが、1号棺の墳形は法面の観察で径 40m 前後の古墳と考えられたが、あくまでも推定にすぎない。

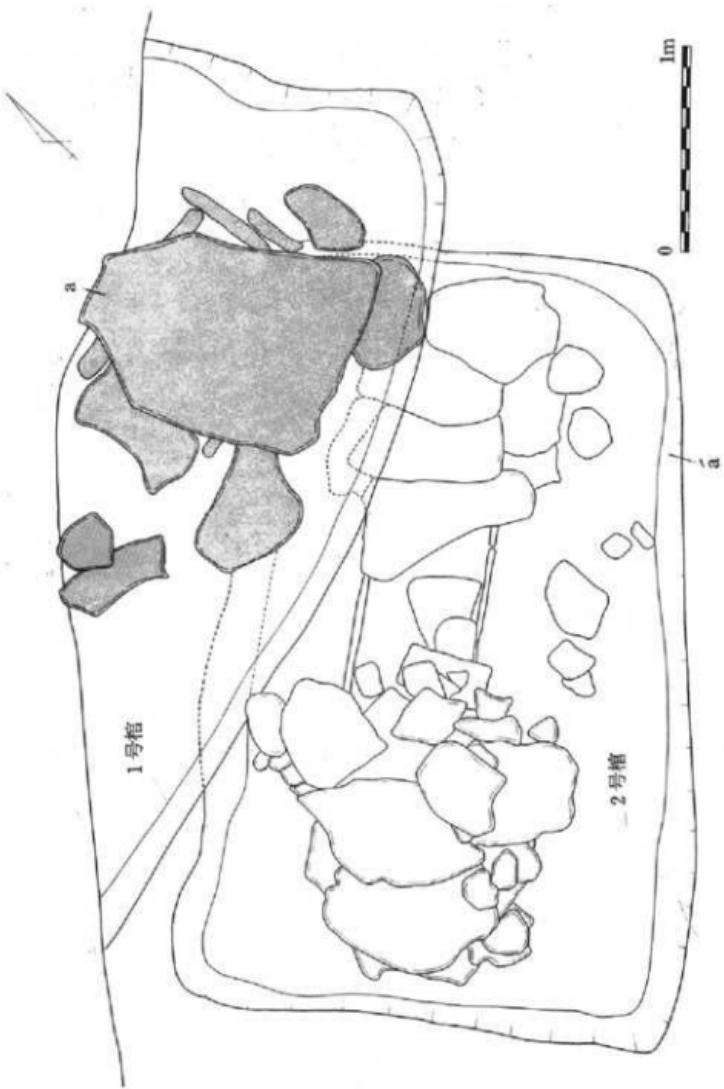
2 内部構造（第5・6図）

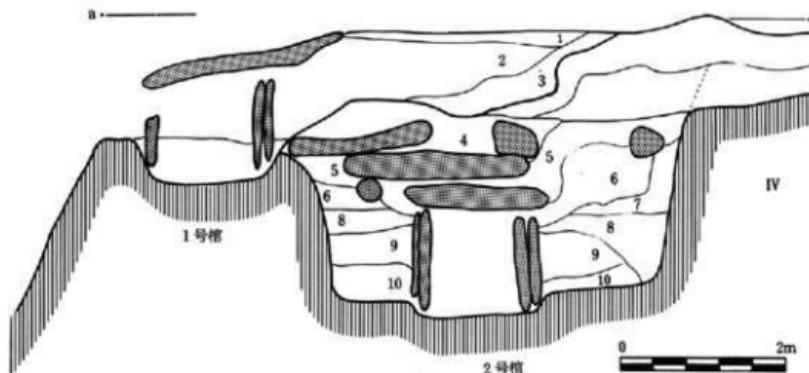
二つの石棺を埋置している墳は、隋円形ないし、長方形を呈した墓壙で、1号棺は不整の隋円形か長方形を呈しているが、半分は取り付け道路により破壊を受けている。2号棺は長方形の墓壙である。

1号棺の墓壙は第III層黒色土層上面よりその掘り込みが始まり、IV層の地山を約15~20cm 程掘り込んで作られている。そして墓壙の底面は平坦とし、石棺の底石を地山の黄褐色土と粘土を混ぜ合わせた土砂で水平に置き、四壁を立てるという方法である。また四壁を立てたのちにそれぞれの側石の外側には純良な粘土で、さらに板石を南長側面には3枚、北長側面には1枚、短側面には1枚を張り合せている。これら石棺の構築方法は取り付け道路により三分の2は破壊され、残存している板石の分解により解明出来た。

2号棺は第III層黒色土層中位よりその掘り込みが始まり、IV層の地山を約 90cm 程掘り込んでいる。底面を平坦にし、約 12cm の厚さで黄褐色土と粘土を混ぜ合わせた土砂を、石棺の大きさに土台を作り平坦にしている。そしてこの土台に四壁とする板石を並べ立て、棺としている。棺の上には偏平な板石を2枚から5枚を交互に積み重ね、蓋石としている。これら蓋石間には純良な白色粘土を用い、防水の役目をはたしている。蓋石の上部には人頭大の自然石を密に覆いかぶせており、石棺の作りとしては県内で類をみない構造をしている。1・2号棺の切り合い関係は第6図の断面に示している様に、第III層における掘り込みや状態や、1号棺の長側石が2号棺の蓋石上に乗っていることで、その造営における先後関係は2号棺が設営され、しばらく経過した後に、ややすれているが隣り合わせの上部に1号棺が設営されたことになろう。

第5図 基礎平面図





第6図 墓壙断面図

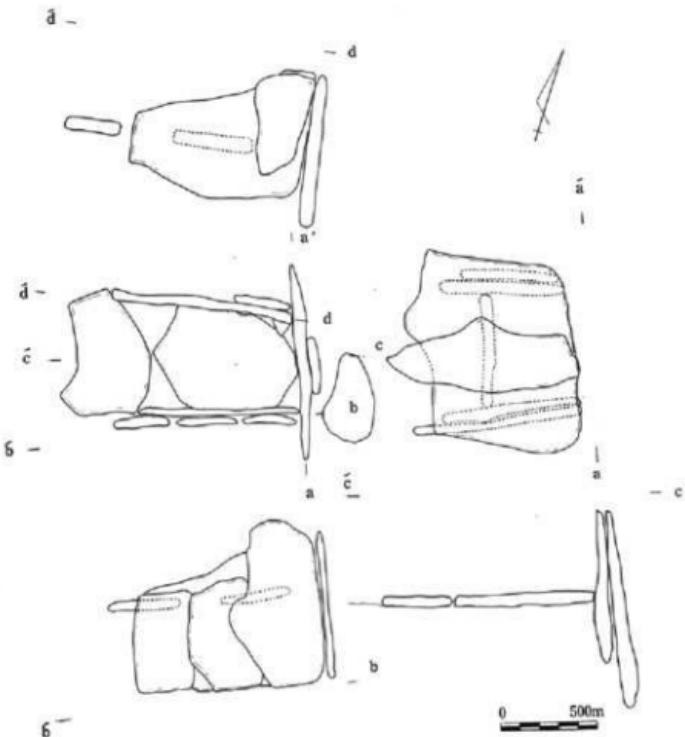
1号棺 (第7図・図版4)

圃場整備取り付け道路の工事中に発見されたのが1号棺と名付けた石棺である。1号棺はその全体のおよそ3分の2程を工事により破壊されて発見されたが、残りの3分の1程は、ほぼ原形で残っていた。残った蓋石は少しずれた形をしていた。

石棺を埋置した形状は11-10グリッドの第III層黒色土層上面に、不整の隋円形か長方形を呈した墓壙で、深さはIII層上面より35cmを測り、IV層の黄褐色地山を約10cm程掘り込んでいる。

石棺は板石を組合せた箱式石棺である。現存している長側面に1枚づつで、外側を西長側面に1枚、東長側面には3枚の板石を白色粘土でおさえ立てている。短側面に1枚、さらに外側に長側面と同様に1枚の板石を立てており、計8枚を用い底面には2枚を敷いてある。蓋石は1枚である。板石の大きさは大きいもので96cm~80cm、小さいもので、30cm~50cmで高さは50cm~100cmのものである。外側を押えている板石は幅の小さいものである。現存している大きさは内法で長さ125cm、幅60cm、深さ48cmである。石の厚さは5~10cmばかりである。

構築の方法は底面の石を敷き、四壁をたてるという手法であるが、長側面が短側面の内側に入っているので、おそらく長側面を先に立て、それから短側面をこしらえたのであろうと思われる。また両側にはそれぞれに幅の小さい板石を粘土で張り合わせ、倒れないようしている。残存している両長側面はわずかに内傾しており、短側面は直立している。底面の石は両長側面にぴったりと密着し、短側面ともう一枚の底石とは石の尖部を合わせ、



第7図 1号棺展開図

両端の隙間に小さな板石を敷きつめてある。

三方の板石は底石の面より45~48cmの高さで水平に切られ、蓋石をのせられるようにしている。蓋石は45×120cm、幅15cmの大きな板石をのせており、発見された時はこの一枚の蓋石だけが残っており、これもわずかに動いた感を受けた。

残存した1号棺を全体から観察すると不整の隋円形か隅丸長方形の掘り込みをIII層上面を約40cm程地山層まで掘り、底面を水平にし、底石を敷けるように約25cm厚さで地山の土砂と粘土を混ぜ合わせたものを土台とし、底石を置き、三方には頭を水平に切られた側石をならべ、さらにその外側には幅の小さい板石を純良な粘土を使い、蓋石と側石との間にもつめこみ、倒れない様な工夫や、雨水の侵入を防ぐように構築している。

出土遺物は工事中石棺が半壊にあった折に棺内に置かれていたものであるが、工事関係者が取り上げたため、棺内での埋置部位は必ずしも明確ではないが、刀剣類は棺内の東側側石に近い部分にあったという。遺物は環頭太刀一振、鉄剣一振、直刀一振、鉄鎌16本、鉄鉗一本、鉄斧一本、刀子2本、冑残片1片、その他の鉄片4片、小型丸底壺1個体で、いずれも副葬品であったと思われる。

2号棺（第8図・図版7～9）

1号棺の墓域を精査中に、北部でその掘り方が別方向に折れ曲ったため、III層上面をさらに全面に掘り下げるに、長方形を呈した別の掘り方が表われ、その内側上部には大きな河原石が一面に発見され、棺が埋置していると考え、2号棺と名付けた。

石棺を埋置した形状は10～12～10・11グリッド内のIII層中位に、不整の長方形を呈した墓域で、深さはIII層中位より98cmを測り、長軸375cm、短軸230cmの大きな掘り込み部である。墓域内部には25～40cm大の河原石が密に埋めこまれている。河原石を取りのぞくと大きな偏平な板石が表われ、蓋石である。

石棺は板石を組合せた箱式石棺である。長側面に5枚づつ、短側面に1枚づつ計12枚を用い、底面には1枚を敷いてある。蓋石は17枚である。長側面の石は端部で2枚に交互し、白色粘土で互いをおさえ立てている。板石の大きさは大きいもので85～102cm、小さいもので65～75cm、高さは50～55cmのものである。蓋石は大きいもので115×100cm、少さいもので90×55cmである。

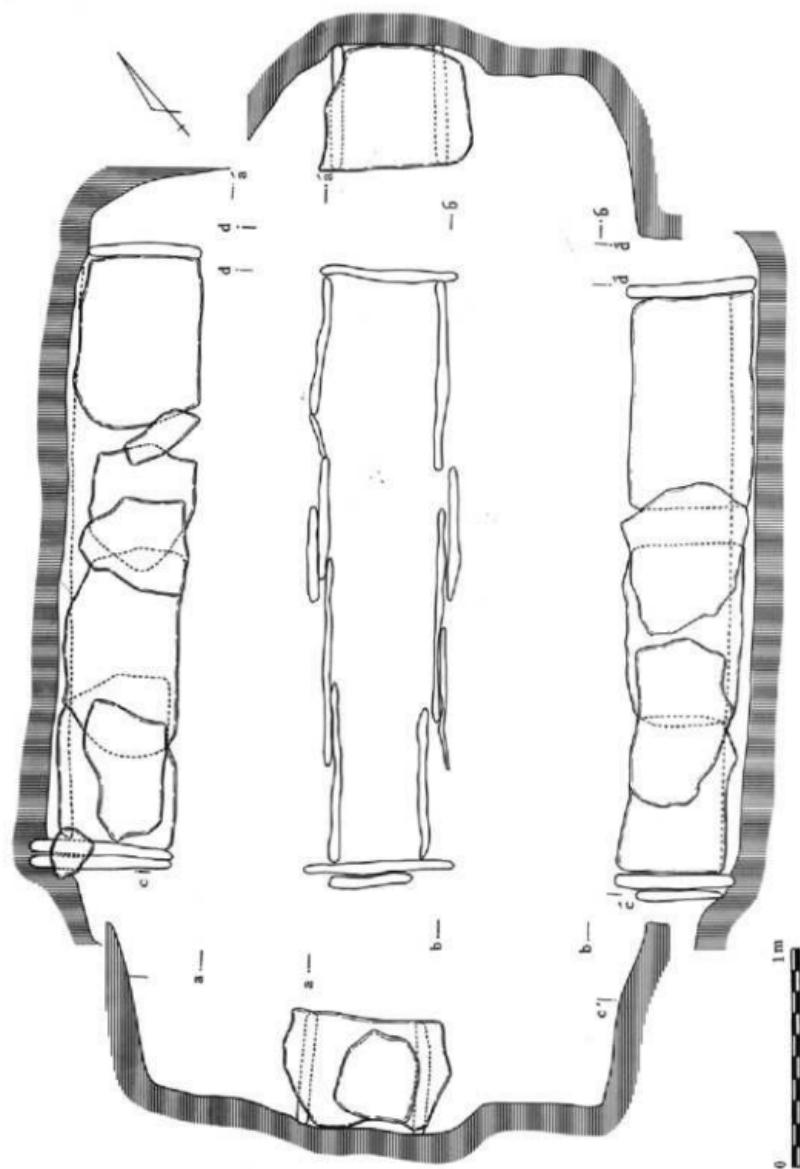
構築の方法は底面の石を敷き、四壁をたてるという手法であるが、長側面が短側面の内側に入っているので、おそらく長側面を先に立て、それから短側面をこしらえたのであろうと思われる。また両側面を先に立て、それから短側面をこしらえたのであろうと思われる。また両側面の板石は3枚を並べたのち、その縫ぎ部分に小さな板石を2枚を粘土で押しあて、倒れないようにしている。両側石はかすかに内傾しているが、短側石は直立している。長側石は土圧で内傾した感を受ける。底面の石は両側面に密着しており、棺端部に1枚しかなく、底面は黄褐色の地山の土と粘土を混ぜて合せ、底石と平坦に敷きつめている。

四壁の板石は底面より45～55cmの高さで水平に切られ、蓋石をのせられるようにしている。また粘土によって間隙を張り付けており、棺と蓋石の間にも粘土で覆いかぶせてあり、防水の役割を果している。

蓋石は両端部で2～3枚、中央部で3～4枚の板石を重複させて架しており、その間隙も粘土で張り重ねている。

2号棺を全体から観察すると、墓域は長方形の掘り込みをIII層中位より約85cm程地山

第8図 2号棺展開図



層まで掘り込み、底面を水平にし、棺を置けるようにやや大きな掘り込みをさらに約15cm程掘り、底石を敷けるようにしている。この掘り込みの底面には一板の底石を敷き、その厚さまで地山と粘土を混ぜ合わせた土砂を水平にし、四方には上部を水平に切りとった側石を並べ立て、蓋石を架している。蓋石の中央部は取りのぞかれ、南側石の中央部が表わしている。それぞれの板石間や、上部には純良な粘土で張り合わせたり、覆いかぶせたりしており、倒れない様な工夫や、雨水の侵水を防ぐように構築している。

棺の両長側石の内側にはペニガラを塗布し、さらに煤様の炭化物を1cm以上の厚さに張りつけており、防蝕には意を用いているが、棺中央部の蓋石が取りはずされていることや、上部の1号棺から流れる雨水がかなり侵透しているようであり、煤様の炭化物が両端の蓋石からつらら状につり下がっていた。

出土遺物は棺内からは雨水の侵透で何らの出土はなかつたが、棺蓋石の上部1・2枚目から馬具の遊環・絞具・杏葉・帶飾金具等22点の副葬品が出土している。棺内からの出土ではなく、蓋石上からの出土は蓋石中央部が取りはずしてはいるものの、特筆すべきことである。県内の古墳の中でも蓋石上からの副葬品を出土する古墳は今だ発見されていない。

VI 出土遺物

出土遺物は、1号棺内より出土したものと、2号棺の蓋石の上から出土したものがあり、いずれも副葬品であったと思われる。出土遺物を一括表示すると次のようである。

出土場所	出 土 遺 物	個 数	備 考
1 号 棺 内	環頭大刀	1	単鳳式、環頭の部分に落押し金象嵌の痕あり
	直刀	1	鹿角製装具の痕あり
	鉄 剣	1	〃
	鉄 鐛	16	片刃箭式
	鉄 斧	1	
	鉄 鋸	1	小型
	刀 子	2	鹿角製柄の痕跡あり
	吊 り 金 具	1	
	胃 残 欠	1	しころの部分か？
	のみ 残片	1	
2号棺蓋 石上	その他の鉄片	1	小片で不明
	土師器	1	丸底壇
	杏 葉	1	劍菱形杏葉
	絞具及び綾	2	
	遊 環	1	
	帶飾金具・その他	11	

出土した遺物は、土師器・皮製品を除く他はすべて鉄製品で発錆が著しい。

1号棺内出土遺物

工事中石棺が半壊にあった折に、棺内にあったものと思われる。棺内での埋置部位は必ずしも明確でないし、工事中失われたものもあったろうが、刀剣類は棺内の東長側面に近い部分にあったという。

(1) 環頭大刀 (第9図 図版12・13)

他の2口の鉄製刀剣と同様鋒を東方向にして石棺の主軸方向に、北壁寄りに併存していたと考えられる。全長95cm、刀部73.1cm、茎部21.9cm、刃幅は鋒より5cmのところで2.5cm、鋒より50cmのところで2.8cm、茎部の近くでも2.8cm、茎部の幅は中央部で1.7cmで、柄頭に近い部分はそれよりも幅が広い。棟の厚さは刀部0.7cm、茎部0.55cmである。鉄製の大刀で、銹化が著しく、刃部の処々に鞘の木質部が部分的に残存している。

柄頭は6.8×4.5cm、楕円形を呈し、環の部分の断面は蒲鉾形を呈する環頭の柄頭で、環の内部に鳳凰が鋲造され、頭頂より冠毛が外環に延びて、二カ処で外環に連っている。外環の装飾文の有無や環内の装飾など锈のため不明な点が多いが、単鳳環と思われ、外環と環内的一部分に落押しの痕跡がわずかに認められる。さらに外環から茎部へ4cmのところに、環部の部分と刀身を結合させた痕跡があり、柄頭と刀身の結合させる部分をそぐようにして削りとり密着させて継いでいる。継いだ部分の茎部の腹の部分には銅線か銀線を繋ぎ巻きした痕が2cmにわたって認められる。刃区は浅く斜めに切られ、目釘穴が明瞭に残る。刀部の断面は二等三角形を呈し、全体的にわずかな内反りの傾向を有する。

以上のように、この大刀は単鳳式環頭を有し、環頭の部分には金箔が貼ってあり、環頭と刀身の焼き目などからみても、この種のものでは古い型式をとどめている。環頭大刀が古墳から出土した例は、本県内では極めて稀であり、この種の大刀の出土例では北限をなすものであろう。

(2) 鉄刀 (第9図 図版12・13)

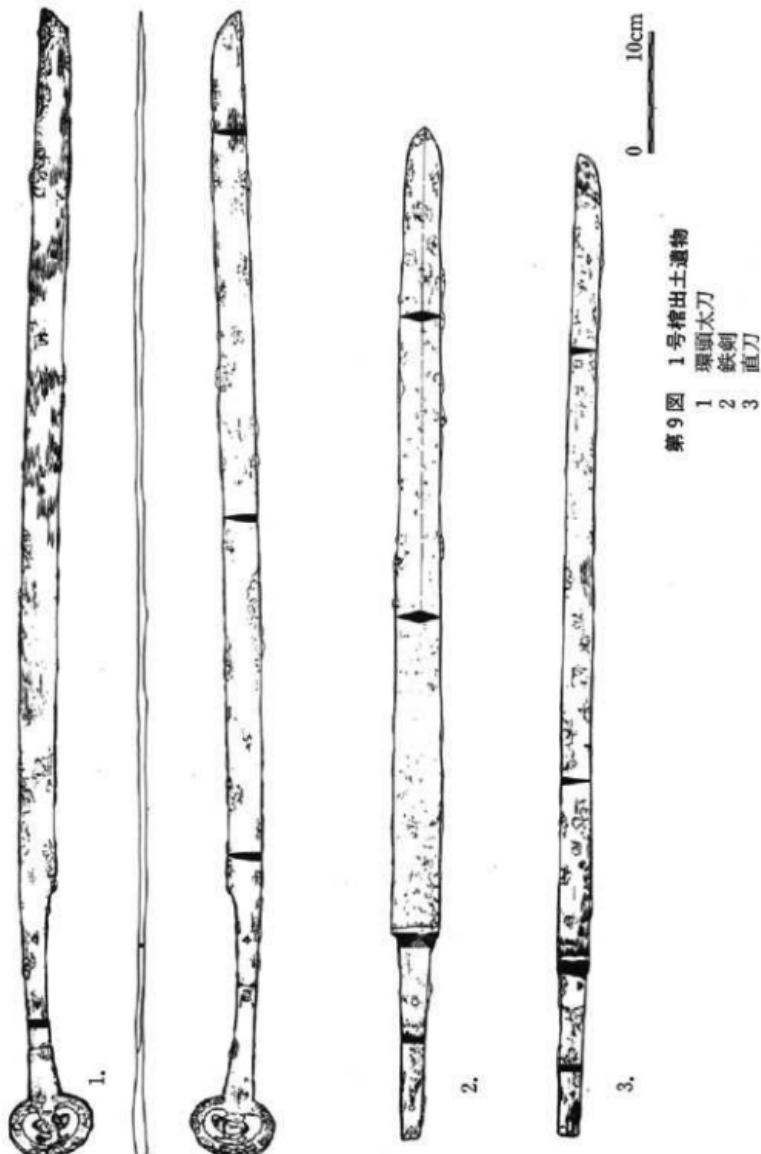
全長81.9cm、刀部の長さ68.1cm、茎部13.8cm、刃幅は鋒より5cmのところで2.3cm、鋒より40cmのところで2.6cm、茎部に近い部分でも同じで、茎部の幅は2cmである。棟の厚さは0.5cm、茎部の厚さも同じである。鋒にはフクラが強くつく。平造りの直刀で、刃区は浅く切られ、この部分に鹿角装具の痕が残存している。刃部に鞘の木質部が付着しているのが認められるが、茎部に近い程著しい。茎部に目釘穴が4箇所に認められる。

(3) 鉄剣 (第9図 図版12・13)

全長84.0cm、刀部の長さ65.8cm、茎部17.5cm、刃幅は茎部に近い部分で4cm、刃先より15cmのところで3.5cm、茎の幅は刀部に近いところで3.0cm、柄頭で2.0cm、刃部の厚さは鍔のところで0.9cmあり、茎の厚さは0.4cmである。茎は柄元から柄頭にいくに

第9圖 1号棺出土遺物

1 環頭大刀
2 鐵劍
3 直刀



つれて幅を減じ細くなる。茎部には2箇所に目釘穴がある。柄元の部分に、やはり鹿角製装具の痕跡が白く明瞭に残っている。鞘の木質部も刃部の茎に近い部分に残存している。

このように全長80cmを越える長大な剣は稀で、東北地方では最大の鉄剣である。

(5) 鉄鎌 (第9図 図版14)

16本出土しているが、他に残片が數本ある。何れも鉄鎌が著しい。長さ10cmより13cmまであり、11cm程度のもののがもっとも多い。細根式で、刃部がナイフのようになっており、片面から刃をつけ、先端は尖り、刃の下端に逆刺がある。刃部の長さは3.3cmより4.2cmまであり、4cm前後のものが多く、全長の3分の1を占める。下端は断面方形になり尖って寬に嵌入される。これらの片切刃式の鉄鎌は、形や大きさにさして大きな差異がなく、規格化されていたように思われる。

(6) 刀子 (第9図 図版14)

長さ10.2cmのきわめて小さな刀子で、身の部分は5cmである。身の部分に鞘の木質部と鹿角の一部が付着しているので、鹿角製の鞘に身の部分が納まっていたようである。刃先は鈍い。

(7) 鉄斧 (第9図 図版14)

鉄板の上部を折り曲げて、中空の袋部をつくり、柄を着装するようにしたもので、有肩式であるが肩の張りが明瞭でない。長さ11cm、刃部の巾5.5cmである。刃部は先端が尖り、やや弧をえがいている。

埋納時に布状に包んだもののように鍔の中に織物の痕跡が認められる。

(8) 鉄鉗 (第9図 図版14)

鍛造具の一つで、鉄床の上で鉄材をはさむ際に用いたものであるが、長さ15.5cmで小形であり、果して実際に鉄材をたたききたてる時に用いられ、実用に供されていたかどうか疑わしい。鍛造がこの地域でも行われていたことを示す遺物が出土したことは興味深い。これにも表面に布痕がある。

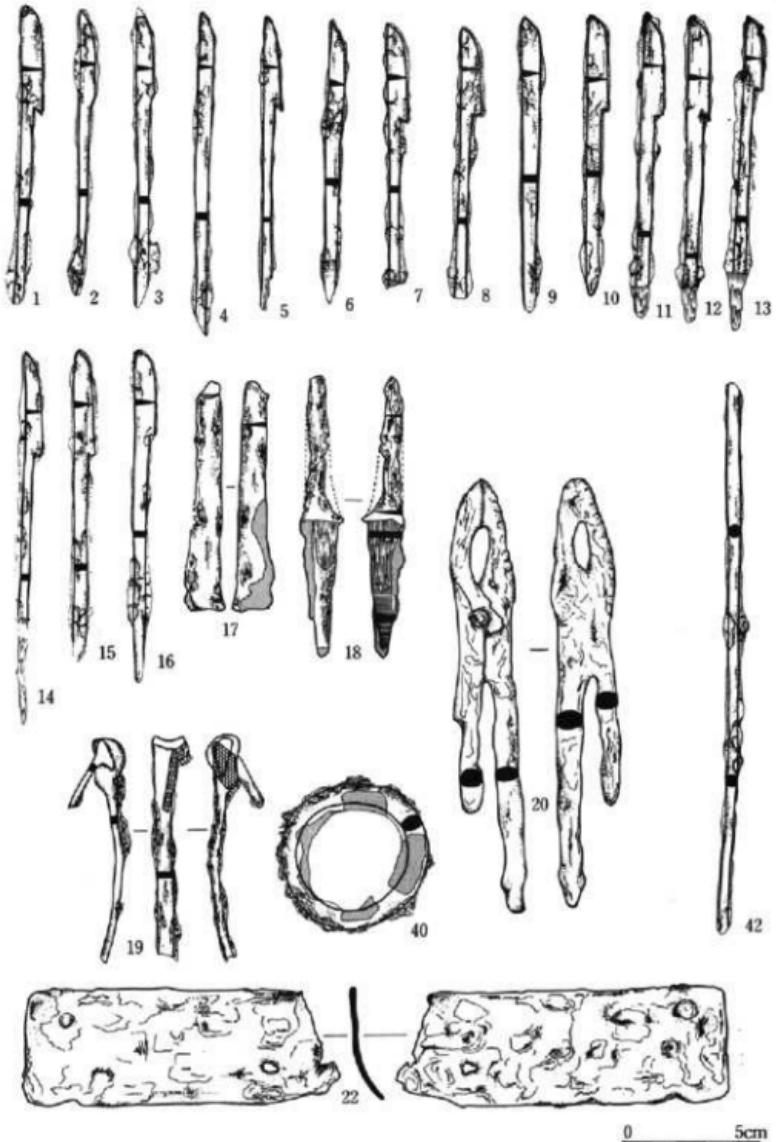
(9) その他の鉄製品 (第9図 図版14)

扁平で弯曲する小鉄板があり、片隅に小さな穴があいている。42×10.5cm、厚さ1.5mm程度で、青の錫のようである。

火箸のような長い小鉄棒があり、長さ20cm、断面円形で径0.5cmである。

吊り金具と思われる鉄製品があるが、部分的に欠損して確かな用途は不明である。

笄形の小鉄片がある。扁平で片側に刃があるようであり、工具の一種と思われるが、基部・先端とも消失した断片であり不明である。



1~20・22・42 1号棺
40 2号棺

第10図 1・2号棺出土遺物

(10) 土師器 (第 10 図 図版 13)

土師器の壇で、やはり棺内から出土したものである。黄褐色を呈し、处处に黒斑があり特に下半部に多い。球型をややつぶしたような胴部から頭部が起ち上り、やや内弯気味に大きく外傾して開く。高さ 14.7cm、口径 10cm、胴部最大径 13cm である。

口縁部はヨコナデが施行され、口頭部に縦位に疎らな刷毛目が認められ、胴部はヘラケズリの後に丁寧なヘラミガキが行われ光沢を帯びる。内面には刷毛目が横位や斜位に不規則に認められ、口縁部に横ナデ、口径部にヘラケズリが施される。

保存良好であったため剥落風化はなく、全面に光沢があり、丁寧なつくりである。成形や調整技法がよくうかがわれる。宮城県の土師器編年上の南小泉 2 式に対当するものと思われる。

2 号棺出土遺物

すべて 2 号棺蓋石上から検出された。検出した状態は蓋石の 1 枚から 2 枚目の上面で発見され、鉄製の馬具の繋部につくものである。以下は個々の遺物について記述する。

(11) 紋具 (第 11 図 36~39・図版 14)

4 個発見された。そのうち 2 個はほぼ原形を保っているが、他は銹化がはげしく、同一の紋具が壊れて二つになったものとはならなかった。

38 は断面径 6mm をした鉄棒をコの字形に曲げたつくりで、最大幅 3.6cm、現存長 5.7cm、留棒の長さは約 5.1cm、太さはいずれの部位も径 5mm を測る。39 も円様に径 6mm をした鉄棒をコの字形に曲げ、最大幅 3.4cm、現存長 5.1cm、留棒の長さ約 4.6cm、径約 5mm を測る。全体に発錆が甚しいが、一部に皮片が巻きつかれている。他の 2 つは紋具の破片と思われるが、発錆が激しく、万不明である。36 は現存長 4.6cm、径 5mm、37 は現存長 2.2cm、径 6mm を測る。

(12) 飾帶金具 (第 11 図 24~32・図版 14)

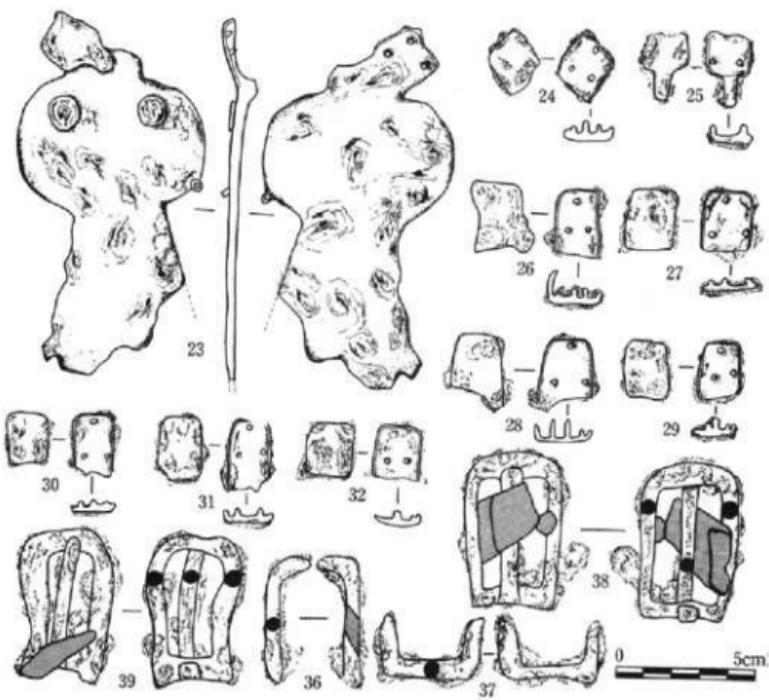
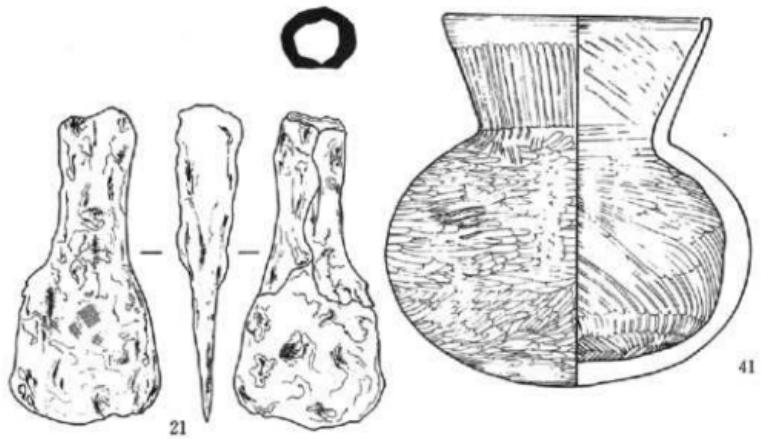
12 個発見された。鉄地銀張りであったと思われるが、銀の部分は剥落している。24 は 1.8cm × 2.3cm の菱形を呈し、3 個の笠を有している。他は 1.8cm × 2.3cm の方形で、これも 3 個の笠鉢を有している。発錆がいちぢるしい。この飾帶金具が発見された蓋石上には皮片が多数検出され、この皮に飾りつけられた飾板と思われる。

(13) 遊環 (第 10 図 40・図版 14)

径 7mm 鉄棒を曲げて、外径 5.7cm の円環にしたものである。単独に検出されたので、引手と銜を連絡する轡の一部をなすものは不明である。環には皮が巻きつけており、発錆で一部がうきあがっている。

(14) 杏葉 (第 11 図 23 図版 14)

鉄地銀張りの剣菱形杏葉と思われるが銀は銹化のため剥落している。銹化腐蝕のため一



第11圖 1・2号棺出土遺物

21・41 1号棺

23~32・36~39 2号棺

部を欠損するが、現存長 13cm、最大幅 5.9cmを測り、上端部に長方形の力革吊り部をもつ。台板は無文の平鉄で、表面の剣菱部に 2 つの笠鉢らしいものを打っているが、裏面に鉢が出ていない。外縁部に一つの鉢穴があり、銀張りをおさえた穴とも思われる力革受け部は飾板の下部を U 字形に折り曲げて、杏葉頭部の貫孔部に接しているが、いずれもその金具が銹着遺存するため、貫孔部の形状は明らかでない。飾板には笠鉢が 3 個あるため、飾板が力革吊り部になったものと考えられる。

〔付記〕

大之越古墳出土の鉄製品については、保存処理を東京国立文化財研究所に委託して実施中であるが、レントゲン透視の際、写真にみられるように、環頭大刀把頭に銀象嵌による文様が確認された。鳳首のみならず、外環にも龍をあらわしたと思われる装飾文があり、まことに貴重な発見である。青木繁夫氏の所見によれば、鳳凰の嘴の部分には金を被せ、外環にも金箔を被せた痕があるという。また頭頂より伸びる冠毛は、頭頂にそれをはめ込んだ穴があり、外環右側中央にも小さなくぼみが認められるが、頭頂よりのびた冠毛をさし込んだ穴かと思われる。

この種の象嵌例は、東日本に比較的多いが、特殊な技法は注目に値いし、稀有な例に属して、今後に種々の課題を提起する。目下慎重に処理を実施しているが、何れその全容が明らかになろう。

V 総 括

1. 大之越古墳について

内部主体

調査中に門伝部落の総代坂本元次郎氏より明治22年作成の地籍図を拝見したが、本古墳の部分には高さ1.5mの塚として記され、周囲は畠地であった。そしてこの付近の地元の呼称は「石墓」と呼ばれ、当時から墳墓の様相を示していたが、その後の開墾により削平され、記憶も薄れその存在は失なわれてしまった。昭和52年より施行が始まった西山形地区大規模圃場整備事業と県道門伝・白鷹線工事により道路の法面に石棺が露出し発見されたのが調査の始まりであった。

本古墳の外部構造は前述の通り整地され、平坦になってはいるが、工事用法面による観察で、2号棺が古墳の中心に埋置されているとすれば、径14~16mの円墳と考えられる。

県内の古墳の主体部は置賜地方の古墳が、ほとんど横穴式石室であるのに対して、村山地方の古墳は組み合せ箱式石棺である。板石を加工し、側石は二枚重ねにして、さらに粘土で補強している。石棺を埋置しているところも墳丘下部にあり、墓壇を作り、内部に石棺を置いていることなどから、高塚古墳の様相を示している。そして一つの古墳に二つの石棺が埋置してその相関関係は被葬者の間に深い関連があり、さして年代差のない一種の合葬墓と考えられる。先に発見された1号棺の墓壇は工事により、約3分の1程破壊されているが、推定すれば3.6m×2.2mの長方形ないし、橢円形を呈し、2号棺は3.8m×2.3mの長方形を呈している。やや2号棺が大きい。深さは1号棺が38cm、2号棺は98cmで地山面を深く堀り込んでいる。

石棺は1号棺が復元長160cm、幅70cm、2号棺は最大長282cm、最大幅70cmを測る。2号棺の石棺は、363cm×66cmの土矢倉二号棺の竪穴式石棺にはおよばないが、板石で組合わされた石棺としては県内最大の長さである。また石棺を覆う蓋石も、端部で2~3枚、中央部で3~4枚を積み重ね、さらに粘土により蓋石を張り合わせたり、覆いかぶせたり防水の役割を示すなど、丁寧な築造をしていることが特色である。

副葬品

副葬品は土師器壙を除く他はすべて鉄製品である。その種類が多様であることと量の多さは本地域の他の古墳に類例をみない。山形市衛守塚2号墳には竹櫛や環状石製品・丸木弓・土器等が副葬されていて特異な存在であるが、多くの箱式石棺には副葬品のないのが普通で、むしろ稀に蕨手刀、直刀、鐵鎌、玉類などが認められる程度である。大之越古墳より40点余りの鉄製品を出土したことは驚異であった。

しかも当時第一級の宝器であった単鳳式柄頭をもつ大刀が出土したことは、注目に値する。この環頭の部分について、「単龍」であるか「単鳳」であるかについては、あいまいで厳密な区分はないが、嘴が明確に表わされており、口を閉じて玉を衝むことがないので鳳凰と判断し、「単鳳環」とした。単龍鳳環はふつう6世紀に盛行するが、古いタイプのものは5世紀に出現をみる。中国では4世紀の東晉以後使用され、朝鮮を経由して日本に導入されたものと考えられている。東北地方でこれまで単龍鳳環を出土した例は、穴沢味光・馬目順一の調査により次の7例であることが知られる（註一）。

福島県伊達郡保原町桂田字桂沢土橋古墳

福島県須賀川市堤垣字上川原甲塚古墳

福島県相馬市坪田

福島県相馬郡鹿島町横手字櫻内古墳

福島県いわき市平下高久字大志田古墳

福島県いわき市四倉

伝・岩手県盛岡市附近「亀岡」

最後の例は疑わしいとされているので、ほとんど東北南部の福島県の出土で、すべて金銅製であり、横穴式石室をもつ円墳から出土した例が多いから、6世紀後半以降のものであろう。これまで福島県保原町土橋古墳出土例が、日本における単龍鳳環頭大刀の最北限であったが、この度の発見によりさらに北上して大の越刀が北限となったのである。

東北地方出土の単龍鳳環は、鳳首が細く、嘴の先が光り、冠毛が後方にのびて外環と愈着し、雉子の頭のようなタイプを示している。そして外環にも文様が認められる。

それに対して本例は、鉄地に金箔を押したもので、内環の鳳凰の嘴の辺にわずかにその痕跡を残す。鳳首は太く鈍重な感じで、頭頂より冠毛が外環にのびるようである。鱗のために外環の文様は確認できない。外環断面は蒲鉾型を呈し、正円率は70パーセント近く、正円形に近い。茎は非常に長く、8.9cmあり、目釘穴で刀身と接続している。従ってこれまで東北各地より出土した単龍鳳環とはかなり趣きを異にする。

日本出土の単鳳環でもっとも古いタイプとされている（註二）奈良県石上神社禁足地内出土例や靖国神社宝物遺品館蔵の伝群馬県高崎市倉賀野出土例に類似する。この二例には、外環に植物文があり、冠毛が外環までのびることはないが、鳳首をはじめ全体的な感じは酷似している。石上神社禁足地内出土例は茎が長く目釘で刀身と接続されるがこの点も同様である。

単龍鳳環は、朝鮮においてその出土例は必ずしも多くないが、5世紀より6世紀前半にかけて盛行した。その古いタイプとされている東京国立博物館蔵の伝慶昌南道昌寧出土例、

白神寿古旧蔵の伝慶尚南道梁山または昌寧出土例、小倉コレクション蔵の伝慶昌南道昌寧出土例などの金銀装環頭大刀の柄頭に趣きを同じくする点が多く、これらはすべて鉄地に金箔を張っているなど類似点が多くみられるのである（註三）。

柄頭が刀身に装着されている状況は、刀身が茎にいたってやや細身になるが、茎の中ごろの部分を一段薄くして、また一方環頭につづく茎の部分も薄くそいだようになっているところを重ね合わせ、二箇所を目釘でとめて接続しており、接続している茎の中央部下には細い銅線などを繁巻きした痕跡が認められる。このような手法は、4世紀末の古墳といわれる奈良県東大寺山古墳出土の「中平」の紀年銘が金象嵌によって表わされている鳥首飾の環頭大刀に見られるし、熊本県江田船山古墳の素環に金象嵌文と竜文が施された大刀にも類似する。茎部を細めて、刃区を浅く斜めに切っている状態も前述のものと同じである。刀身は細身の平造で、断面は二等辺三角形を呈し、若干内反り気味で、峰にはフクラがつく。全体的に4世紀後半より5世紀前半に多くみられる素環頭大刀との共通点が多く、5世紀後半は下らない、この類のものでは最も古いタイプに属する環頭大刀としてよいであろう。

この環頭大刀の製作地は、東国のかどであろうか。また朝鮮より持ち來したものか、あるいは西日本のどこかで渡来系工人の手になったものであろうか。現地の首長の同盟・服属などの代償として下賜されたと思われる公算が強い。従って当時の畿内政権と地方首長との関係や畿内政権による国内統一や影響力を推しあかる重要な資料である。

これとともに出土した鹿角製刀装具の痕跡を残す鉄劍と直刀も貴重な遺物である。それは柄元の部分に鹿角が付着しているのみで、その形や装飾の状態は不明である。東北地方の古墳より出土した鹿角製刀装具の例では、宮城県名取市経の塚古墳出土の直刀（註四）、福島県双葉郡浪江町上の原4号墳（註五）、福島県郡山市田村町正直27号墳出土鉄劍（註六）、福島県双葉郡浪江町加倉古墳（註七）などがある。これらの多くは直弧文を刻出しておらず、直弧文の技術は畿内を中心に5世紀代に盛行したものである。大之越の例は、おそらく直弧文を刻出した鹿角製装具付装の大刀と劍であったと考えられ、畿内政権から各地の首長に分与されたものとみられるのである。しかも鉄劍は、長さ84cm、巾4cmで、昨年9月、金象嵌の銘文115文字が発見され、大きな衝撃を与えた埼玉県行田市稻荷山古墳出土の鉄劍73.5cmよりはるかに長大である。東北地方より出土している鉄劍のなかではもっとも長大なものであり、直弧文を施した鹿角装の鉄劍は、特別な呪力をもった神聖な遺品であったのである。

刀子も鹿角製の柄や鞘が用いられたことは、わずかに付着している痕で判明できる。

鉄斧や鉄鉗など工具が出土したことでも重要な事実を暗示する。同様の鉄斧は、近くの山

形市柏倉中林古墳からも出土しているし、山形市鷺の森遺跡からも出土している（註八）。鉄鉗は長さ 15.5 cm でミニチュアであり、実用に供されたものかについては疑問があるが、本地域にすでに鍛冶の技術が存在していたことを証明するに足る資料である。斧頭と鉄釣は表面に布様の織維が付着しており、布に包まれて埋納されたものであろう。工具では他に断片であるが、鉗かのみの柄と思われる扁平な鉄器がある。

鉄鎌は、ほぼ定形のものが 16 本あるが、残欠もあり発掘時に紛失したものもあるだろうと思われるので実際に副葬された数はもっと多かったであろう。長さ 11 cm 及至 12 cm ぐらいのものが多く、細根式の片刃箭で、刃の下端の逆刺がつき、柄の部分は断面方形で、籠に嵌入される部分は細くなる。一様に小さな刃のような鎌である。このような片刃箭式のものは、東国では 6 世紀代の古墳からの出土例が多いが、5 世紀の半ば以後にこのような刀子に似た片刃の鎌が出現するようである。

他に鉄製品では、吊り金具と思われるもの、背の鎌の部分と思われる矩形の扁平な小鉄板が出土している。

土師器の埴は全面にわたって範みがきが施される光沢ある器壁で、胴部球形、口縁が外に開きながら上方に伸びる形は、5 世紀頃に比定される南小泉 2 式に対当する。これと類似した例は、南陽市松沢 1 号墳から出土している。土師器でながく伝世させて、後に副葬された例はないであろうから、本古墳の築造年代をもっともよく暗示する資料となる。

馬具は 18 点の出土である。すべて 2 号棺蓋石上からの発見で、鉄製のため発锈がいちぢるしく、飾帶金具（辻金具）と杏葉には銀張がほどこされていたものと思われるが、銹化で剥落している。釣具や遊環（円環）には皮が巻きつけられており、盛装用馬具として用いられたものと考えられる。

本県の古墳から馬具の出土は初めてであり、杏葉は福島県宮城県から出土しているが、剣菱形杏葉はこれが東北地方で最初である。

これらの馬具は 1 号棺出土の環頭太刀や鉄劍等よりもその時期は古いものと考えられるが、その差はさほどはなれているものとは思われない。杏葉も形から言えば、環頭太刀と同時期位と考えられ、2 つの石棺は近親関係の被葬者の棺で、かつて愛用していた大刀や剣と共に盛装用の馬具等、供獻していたことが想定できる。

註一 穴沢昭光・馬目順一「東北地方出土の環頭大刀の諸問題」福島考古 19 号 1978 年

註二 新谷武夫「環状柄頭研究序説」「考古論集・慶祝松崎寿と先生六十三歳論文集」所収 1977 年

註三 穴沢昭光・馬目順一「龍鳳文環頭大刀試論——韓國出土例を中心として——」「忠南大学校百濟研究所論文集第七輯」所収 1976 年

註四 伊藤玄三「五世紀の古墳」「古代の日本 8 東北」所収 1970 年

註五 伊藤玄三「福島県上の原4号墳の鹿角製刀装具」福島考古14号 1973年

註六 穴沢洋光氏の御教示による。

註七 生江芳徳氏の御教示による。

註八 横戸昭二「山形市鶴の森遺跡」山形考古2-1 1972年

2. 大之越古墳と周辺遺跡

大之越古墳周辺には、いわゆる古式土師器を出土する遺跡が数多く点在している。次表に示した遺跡および古墳は、当古墳と同一時期、あるいは相前後する時期のものと考えられるものを、遺跡地名表より抜粋し転載したものである。

近在する集落跡は、古墳から見おろせる低湿地・湧水地帯の中でもやや高い所に立地し、古くから周辺において水田農耕がいとなまれ、かなり大規模な集落が序々に形成された事が、遺跡の分布・発掘調査等の結果から理解する事ができる。

特に、昭和52年度に実施された坊屋敷遺跡の緊急発掘調査では、地床炉を有する方形の竪穴住居跡が5棟検出され、内部より壺・壇・器台等、多量の古式土師器がセット的なまとまりをもった状態で出土している。

他に主要な遺跡として、谷柏遺跡・萩原遺跡の二遺跡がある。谷柏遺跡は水田耕地整理作業中に発見されたもので、棒状浮文や折り返し口縁の壺・高杯・器台等の多量の土師器が出土し、あわせて、井戸枠・植物の種実や核果（ヒヨウタン・モモ・クルミ・クリ）・穀・木製品等が出土している。萩原遺跡は、本沢川によって形成された微高地上に立地している。水田耕地整理工事によって、多量の壺・器台・高杯・杯等の土師器が出土し、明確ではないが、方形の住居跡らしき遺構が確認されている。

つぎに菅沢古墳群について説明を加えてみたい。菅沢古墳群は、海拔150mの丘陵上に位置する古墳で、1号墳と2号墳からなる。立地・墳丘の構築方法・出土遺物からみて大之越古墳とそう大差がない時期に营造された古墳と推測される。1号墳は直徑25m程の円墳で埴輪を有する。2号墳は直徑56mの円墳で、二段構築、二列に埴輪をめぐらせている。

主体部は未調査のため、両古墳とも明確ではないが、墳丘外において石英粗面岩の板材を利用して作られた箱式石棺が2基検出されている。また注目すべき古墳として中林古墳がある。当古墳は坊屋敷遺跡と隣接した丘陵の先端部に位置し、箱式石棺が検出され、内部より古いタイプに属する鉄斧一個が出土している。

表中にかかげたものを含め、これらの集落跡・古墳は出土遺物から4~6世紀頃に継続的にいとなまれた遺跡という事ができる。古墳時代にはいると農業生産力の増大とともに、集

落が拡大化してくるが、その集落において権力を誇示していた首長とでもいべき支配者階層の人達が、大之越古墳をはじめとする一連の古墳に、埋葬されたものと考えられる。

3. 本古墳の築造年代と被葬者について

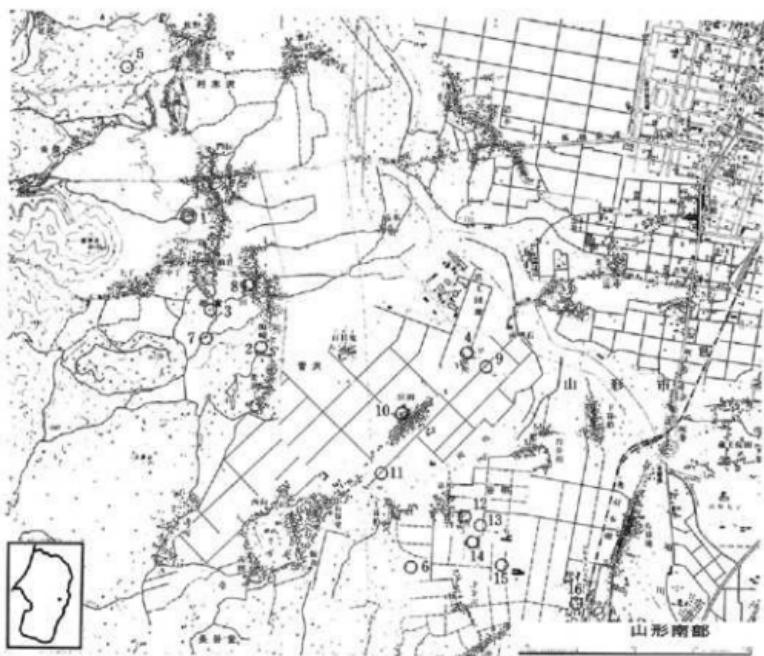
最後に大之越古墳の築造年代と被葬者について考えてみよう。副葬品の中には、年代を推知し得る資料がいくつか含まれているが、副葬品の中にはながい伝世を経て埋納されたものもあるし、また、後世に追葬されたものもある。それに同じようなものが、畿内にあつたとしても東国に伝播されるまでの年代のずれをどう考慮するかの問題点もある。従つて厳密な検討が必要であることは言を俟たない。

しかし本古墳の内部構造が竪穴式古墳であるから、横穴式古墳にみられるような追葬は考慮する必要がないし、畿内中央との年代のずれも、後で論及する理由でほとんどなかったものと思われる。以上を前提としながら本古墳築造の年代を考えるならば、5世紀後半より6世紀前半までの巾をもって考えることができる。その論拠については、これまで度々触れてきたが、もう一度整理して本古墳の特色をまとめてみよう。

- ①大之越古墳は、山形盆地を望む丘陵上に立地する。
- ②墳丘は10数mの円墳と推定され、周濠がめぐる。
- ③内部主体は箱式石棺で、主軸方向を異にした上下2基の石棺からなり、下の2号石棺は地下に墓域を掘り、埋置してあり、上の1号棺も地表を若干掘りくぼめて構築している。
- ④石棺は長大で、構築法はきわめて丁寧になされ、防腐や防水のためにベニガラ・煤などを用い、さらに間隙に良質の粘土を塗付している。
- ⑤1号棺内より、單鳳式環頭大刀・直刀・鉄劍・鐵鎌・鐵斧・鐵鉗・刀子・土師器壙・その他の鉄片が出土しており、2号棺蓋石上より剣菱型杏葉・遊環・紋具などの馬具が出土したが、それらはすべて副葬品である。

これらの中で、もっともよく年代を示すものは副葬品であり、環頭大刀・鹿角製装具付装の刀剣、そして土師器の壙は、5世紀後半の年代であることを暗示する。ただ鐵鎌、杏葉などに6世紀代の要素が指摘できるが、畿内の古墳では5世紀後半より出土しているので、6世紀に下げて考える必要は全くない。環頭大刀が6世紀に盛行する金銅製環頭大刀に先行する形式であり、鹿角製刀装具や土師器壙も明らかに5世紀代に用いられたものである。5世紀でも後半の6世紀に近い第4半紀にあたるとすれば、他の出土遺物もさして矛盾ないであろう。古墳時代を前・中・後・終末の四期に分けた場合の中期に位置づけられようし、8期に区分した場合は第4期にあたるであろう。

大之越古墳の被葬者については、副葬品の多様さや内容の豊かさより考えて、有力な首



第12図 大之越古墳と周辺遺跡

周辺遺跡一覧表 表1

	遺跡名	種別	所在地	地目	時期	遺跡・遺物の概要	備考・その他
1	大之越古墳	古墳	山形市門伝字大之越	道路畑	古墳	県道新設工事中に発見・緊急調査を実施。二基の石棺が検出され、一号棺より、環頭大刀・鉄劍等鐵製品が出土。二号棺より馬具が出土。	
2	菅沢古墳群	古墳	山形市菅沢字山崎	畑	古墳	丘陵上に位置・底径 56cm の円墳・築成は二段構築・器材・円筒埴輪を二列にめぐらす。	2基の古墳より形成されてい る。昭和43年10月調査
3	中林古墳	古墳	山形市柏倉字中林	畑	古墳	丘陵上に位置・内部主体は箱式石棺・墳形は円墳と推測される。内部より鉄斧が出土。	
4	上り龜下り龜古墳	古墳	山形市前明石	水田	古墳	平地に位置・墳丘はわずかを残すのみ。石棺の一部が露出。	
5	村木沢	古墳群	村木沢字谷地	畑	古墳	丘陵上に位置・箱式石棺円墳、後期古墳の可能性大	
6	谷柏古墳群	古墳	山形市谷柏	畠・墓地	古墳	丘陵上に位置・17基の箱式石棺よりなる円墳で、石棺内部から直刀・土師器等が出土。	昭和31年県指定
7	坊屋敷	集落跡	山形市柏倉字坊屋敷	水田	繩文古墳～平安	緊急発掘調査を実施数棟の方形の堅穴住居跡が検出され、内部より多量の土師器等が出土	昭和52年5月～7月調査 未報告
8	塩辛田	集落跡	山形市柏倉字塩辛田	畠・宅地	平安～鎌倉	微高地、発掘調査により土括が検出され、その箇所より多量の土師器が出土。	昭和51年5月～6月調査 未報告
9	落合	集落跡	山形市前明石字落合	水田	古墳～平安	圓場整備工事中に、多量の土師器が出土。	
10	寺裏	集落跡	山形市二位田字寺裏	水田 田畠 畑	古墳～平安	平地、発掘調査により多量の土師器が出土。	昭和48年9月～10月調査 報告済
11	萩原	集落跡	山形市長谷堂字萩原	水田 田畠 畑	古墳～平安	舌状の微高地に位置。造成工事中に方形の住居跡と推測される遺構を確認。	
12	谷柏	集落跡	山形市谷柏	水田 田畠 畑 宅地	古墳～平安	平地。かなり広範囲にわたって遺物の散布が認められる。多量の土師器とともに、井戸枠等の木製品が出土。	
13	沢田	集落跡	山形市谷柏字沢田	水田 田畠 畑	弥生～平安	平地。方形の堅穴住居跡が検出され、折り返し口縁の壺等、多量の土師器が出土。	
14	石田前	集落跡	山形市谷柏字石田	水田	古墳	平地、暗渠工事中に多量の土師器・木製品等が出土。	
15	毘沙門	集落跡	山形市谷柏字毘沙門	水田	古墳	平地。暗渠工事中に多量の土師器・大形木製品等が出土。	
16	横手区	集落跡	山形市松原字横手	工場敷地	繩文古墳～鎌倉	平地、石圓炉状の石組を検出、内部より土人形、脇より土師器が出土。	

長であり、おそらく山形盆地一帯を統合し支配した首長が葬られたものであろうと思われる。当時畿内においても第一級の宝器とみなされる環頭大刀や鹿角製装具付装の刀剣・劍菱型否葉等が副葬されていたことは、畿内政権との密接な交流を暗示するものである。畿内政権との関連の内容は、単なる文物の伝播や文化の交流を越えた政治的な結合があったと推測せざるをえない。山形盆地の首長に対して畿内政権がかなり大きな影響力をもって同盟・服属等の関係を有し、環頭大刀や鹿角製装具付装の刀剣を賜与したものと考えられる。在地首長は畿内政権との結合を強めることによって、鉄製の武器や、鉄斧、鉄鉗などに象徴される鉄製工具や農具を入手し、その技術援助のもとに生産を拡大し、自己の權威を確立することができた。本古墳出土の副葬品から、畿内政権により首長權の承認をえて山形盆地一帯を統合支配する有力首長が5世紀後半に出現したことが推測される。そして当時もっとも新しい生産用具であった鉄製の農工具の生産を一手に掌握し、騎乗の威をもつ首長像をおもいかべることができる。

この近くにある菅沢2号墳は、56mの大円墳であるが、その後継者が大之越古墳の被葬者であると考えることが可能であろう。それにしても、副葬品の豊富さのわりに墳形が余りにも貧弱であることは如何なる理由にもとづくのであろうか。山形盆地における6世紀代の古墳は、すべて20mを前後する円墳であり大型古墳は全くみられない。それは菅沢2号墳と大之越墳の築造の間、つまり5世紀中葉より末にいたる間に、畿内政権による直接的支配力が強化され、その身分的政治秩序の中に組みこまれたことを暗示する。

いずれにしても、本古墳の存在は畿内政権による東北地方への影響力が意外なほど早い時間に行われ、またその強さを示しており、国内統一の内容や実態をものがたる重要な問題を提起するにたる資料がここに提示されたといえるであろう。

図 版



大之越古墳遠景（宮神山を望む）



大之越古墳遠景



墳丘基礎断面



発掘区全景



石棺埋設部掘り方（右 1 号棺左 2 号棺）



周溝（？）

图版 4



1号棺全景



1号棺内部



1号館・東長衡石・培側石断面



1号館・短側石（外面）



1号柱埋設部掘り方断面



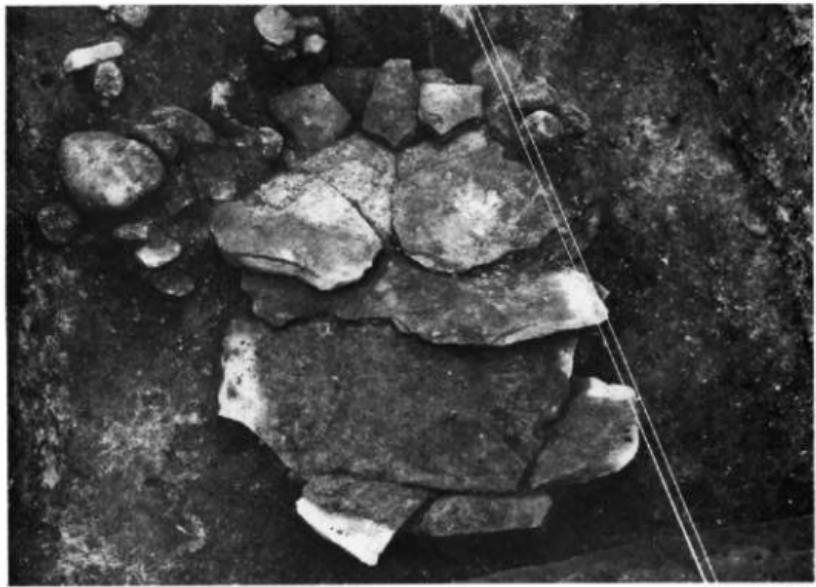
1・2号柱全景



2号蓋石上の自然石



2号蓋石



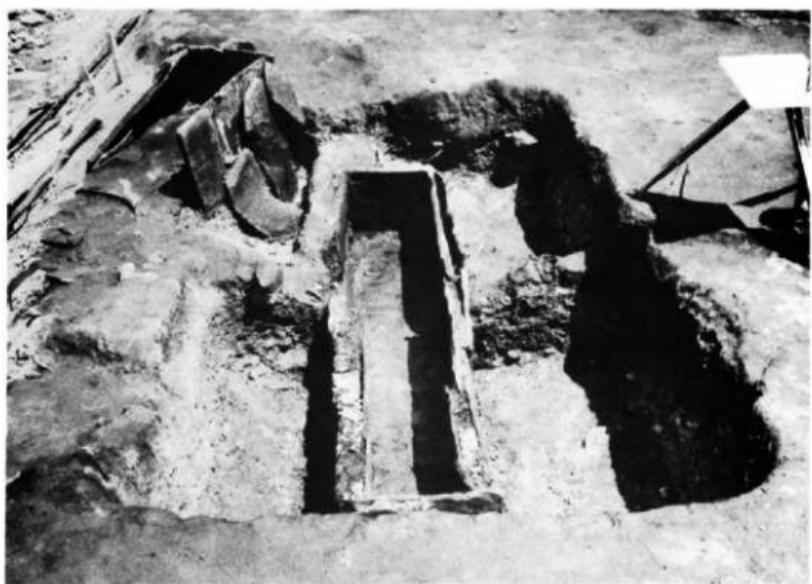
2号棺蓋石南半部



2号棺蓋石北半部橫狀態



2号棺蓋石取り上げ後



1・2号清掃後



杏葉出土狀況



絞具出土狀況



內裡出土狀況



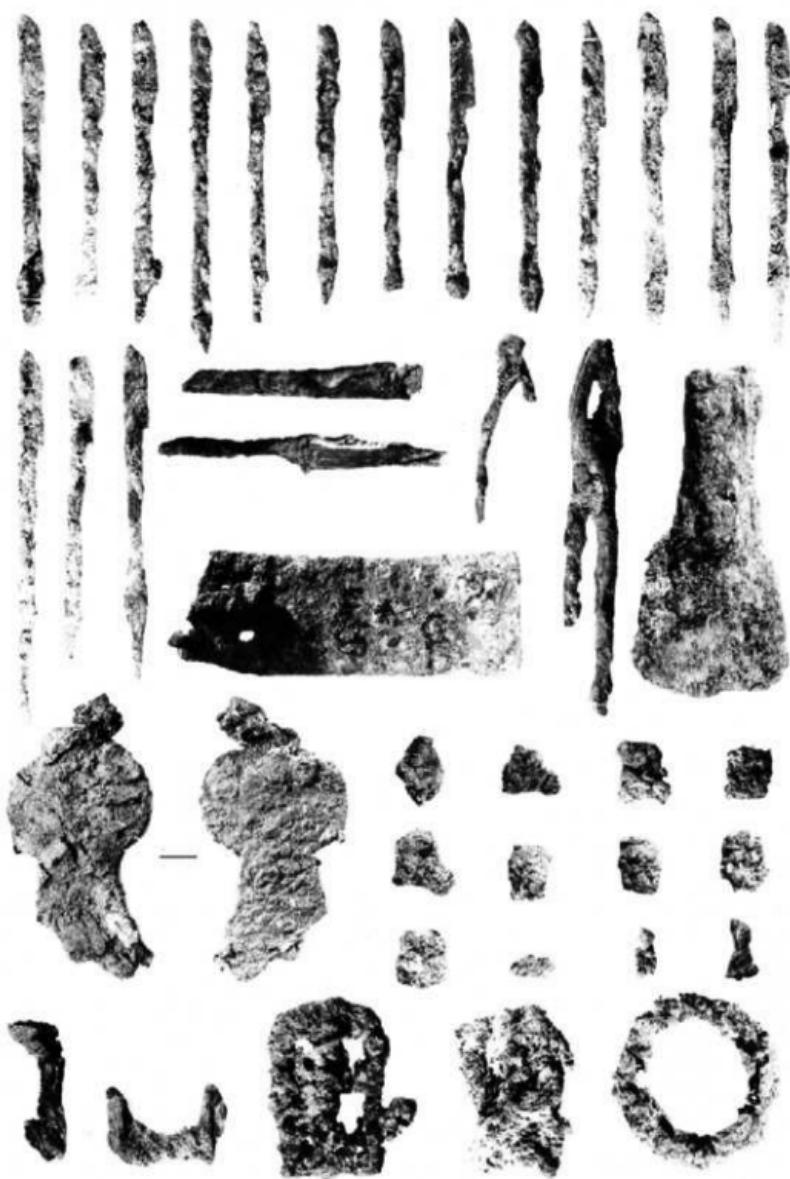
帶鈎金具出土狀況

1号棺出土遗物（华丽大刀·利·面刀）



1号棺出土遺物（環頭大刀、劍、直刀）橫剖部分・小型丸底壺（ $S = 1/2$ ）





出土遺物 1~22 1号棺 23~40 2号棺



環頭大刀把頭の透視写真
東京国立文化財研究所 提供

山形県埋蔵文化財調査報告書第18集

だい の こし
大之越古墳

発掘調査報告書

昭和54年3月28日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社 大風印刷

山形市あこや町1-4-3 TEL31-5675#0
